

埼玉の強み

埼玉県川口市に本社を置くニッポーは電子制御機器の専門メーカーだ。近年は農業分野の生産管理・制御システムに力を注ぎ、農作業の効率化を目指す生産者の需要を開拓。長年培った独自技術を応用し、担い手不足や後継者難に悩む日本の農業を支える。

農業分野の代表的な製品が2014年に投入した「ハウスナビ」シリーズ。ビニールハウス内部の温度や湿度、風量、光合成の量などを自動的に制御し、作物の最適な成長を促進する。生産者の作業負担を減らしつつ、安定した収穫量を確保できるのが特徴で、全国か

制御技術で農業の悩み解決

ら注文が舞い込む。

トマトやピーマン、キウリ、イチゴなどハウス栽培のさまざまな現場で活躍。利用者からは導入前に比べて「生産量が3割以上増えた」との声も寄せられたという。

19年には田畑の灌水（かんすい）設備を遠隔で操作・管理する「灌水ナビ」を発売。20年9月にはスマートフォンでも操作・管理できるクラウドサービスを始めた。

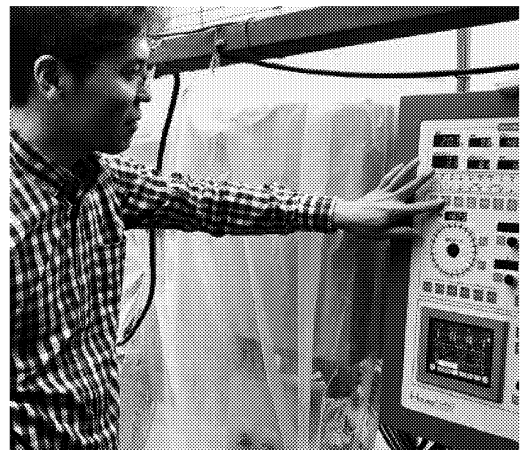
1964年に東京・杉並で設立した当時の社名は「ニッポー電気」。当初は電子機器関係の受注が多かったが、大手の参入で競争が激化した。新たな事業分野として、タバコ栽培用の温度管理システムを開発し、農業分野への第一歩を踏んだ。80年代には野菜やキノコ栽培用の温度管理・制御システムも開発し、製品の幅を広げてきた。若槻憲一社長は「大手がやらないニッチな分野に参

担い手不足、データが補う

入してきた。事業を多角化しなければ生き残れない」と話す。

農業分野のシステム開発を加速したきっかけは12年。「スマート農業」の先進国として名高いオランダの最新事情をテレビで知り、制御技術を駆使した農業の可能性を再認識した。

開発担当者が九州の農家などを訪ね歩き、現場の課題を探った。一般的に日本の農家は欧米に比べて栽培規模が小さく、生産性に難があった。コマや野菜、果物の収穫を増やすノウハウは家族代々で「経験知」として受



ニッポーが開発した農家向け生産制御システム「ハウスナビ」

制御技術を活用することでビニールハウスや田畑の管理を効率化できるだけでなく、作物にとって最適な環境をデータで数値化できる。栽培ノウハウの「見える化」で、熟練の技や勘に頼らず安定した収穫量を確保できる利点がある。

「新型コロナウイルスで新しい働き方が模索されるいま、農家の負担軽減が求められる」と若槻社長。スマート農業の普及を目指し、自社技術をフル活用する。

（岩崎貴行）